幼兒之教育

第四十四卷　　十二月號　　第十一號

東京女子高等師範學校內

日本幼稚園協會

保育奉公

大東亞戰爭必勝完遂

第四十四卷　幼兒の教育　第十一號

（目次）

幼兒と共にあるものゝ心づくし……倉橋惣三（一）
幼兒集團疎開について……森脇要（三）
凍傷の常識……勝又俊一（六）
日なたの畑（二）……及川ふみ（八）
人形芝居雜記……安村ふさ（九）
春を待つ……志村貞子（一四）
東京女子高等師範學校保育實習科入學者募集……（一六）
陣友音信（四）……倉橋惣三（一八）

幼兒と共にあるものゝ心づくし

倉橋惣三

苛烈なる戰下に、今年も暮れてゆくといふよりは、年の暮るゝことなど想ふ暇もないのが、われ〳〵おとなの心である。戰爭に曆はない。敵等は、ことしのクリスマスを、どこで樂しくしようなどゝ、思ひあがつた寢言を言つたとか小耳にしたが、その夢もどん〳〵砲擊爆襲で破碎せられる。戰爭にまつたなく休憩なく、銃後の覺悟にも用意にも、一刻の隙も怠りもあつてはならない。その意味で、われ〳〵おとなの心持には、目の前に來てゐる暮も正月もあつたものではない。

しかし、子ども殊に幼い子らに對しての心づくしは、それとはおのづから別である。幼い子らに對する戰下の心づくしは、一面戰下の少國民として、しつかり戰時を生活させると共に、また一面、戰時から彼等の生活を護つてその成育を能ふ限り豐富に充實させてやりたいことである。心に天下の憂ひを抱きながら、われわれが日々幼兒と共に嬉戯してゐるのも、この心づくしからに他ならない。來るべき正月、日本の子どものあんなに喜び樂しみ待つてゐるお正月を、戰時下ながら、幼い子らのために、出來るだけ喜ばせてやり、樂しませてやりたいと思ふのも、この心づくしから出る一つの保育ごゝろである。

門松もあるまい。しめ飾りもあるまい。お雜煮の餅もどうだらうか。その上、職場に忙しい父や母に、年賀の賑でもなく、松の内三ケ日の休日もあるまい。子らにしても、晴着のないのは素より、お正月菓子もお年玉の玩具もない。元朝早々ラヂオに聽く戰果の數々の前に、それはあたりまへのことであり、子らも、ちやんと心得てゐることである。がしかし、といつては、どこかに不徹底感が殘るが、だからこそと言はふか、日本の子どもが與へられつゞけて來た傳統としてのお正月を、この子らにも、この子らとしての樂しさと喜びとに味はせてやりたいと、どこかに聊かのいぢらしごゝろもまぢつて思ふのである。又それが、幼稚園や保育所の、すなはち、戰下に幼い子らの世界を護るべく委ねられてゐる施設の、大事な一つの任務でもなければならぬのである。

○

今日、子らを樂しませてやらうとするには、日々のことにしても、なか〳〵苦心がいる。殊に、お正月を多少ともお正月らしくするには、容易ならぬ苦心がいらう。そこを何んとか工夫して、個々の家庭では迎へられないお正月の形もつけてやりたいものである。室飾りの物資はないとして、黑板はある筈だし、白墨はある筈だし、赤、青、黃位は仕舞つてもあらう。そこに保姆さんのお正月裝飾者としての手腕の振ひ場がある。すころく、かるた、

既成品を玩具屋に求めることはむつかしいとして、さがせば何かの厚紙もあらうし、少々の繪の具もどこかにあるだらうし、保姆さんの手で、いくつかのお正月玩具が用意出來よう。或は、却つてふだんよりもいゝものが、今日の幼兒に適して作られるかも知れない。更に必ずしも玩具を用ゐなくても、いくらでも樂しい遊びの出來るのが、幼稚園の長所の一つであるが、お正月娯樂會のいろ〳〵の趣向は、保姆さんのお手のものである。率直にいへば、それもふだんのやうに大げさなものでなくていゝ。この頃の砂糖の足りない幼兒食品のやうに、甘さが足りない娯樂でも、幼兒は充分滿足して呉れる。

たゞ、これらの一切を通じて、物に足りず甘さが少くとも、保姆さんの心のやさしさが、やわらかさが、その心づくしが、顏色に言葉に出て、それを補つて下さればいゝ。それこそが、今日、幼兒と共にゐるものゝ心づくしの全部だと言つていゝかも知れない。お正月を幼兒らと迎へるに當つても、その用意こそ何よりの用意であらう。

幼兒と共にゐるものは、常に、幼兒と同じ心にあらねばならぬが、同じ心にあるとは、幼兒の心についていくだけではない。幼兒の心に先立つものでなければならない。しかも、先立つといふのは、時としてばかりではない。お正月を、もう幾つ寢ると、待つてゐる子らと共に、暮の内から、その正月を待つてゐてやるのは保姆さんの常の心がけであるが、眞に幼兒と同じ心になつて子どものお正月の樂しさを自分にも樂しみとする心、これこそ肝要のことである。わけても、戰時の務めで一ぱいになつてゐる保姆さんとして、この心構へは特に忘れてなるまい。つまり、それさへあれば、子らと共に、子らのお正月を、立派に迎へてやれるのである。

○

但し、來るお正月が、子どもながらに、戰下の正月であることはいふまでもない。戰時から幼兒を護るといつて、戰爭を忘れ、戰爭を離れてゐるといふ意味では決してない。たとへば、戰下にも出來るだけいゝ食事を子らに與へ、子らの食事をよろこばせてやらうと心づくしながらも、食前の「兵隊さんありがたうございます」を忘れないと同じである。新らしい年の初めとして、戰爭のことを、更めて幼い心に思はせるのも必要であり、こうして樂しく面白く喜び遊べるのも、「兵隊さんありがたうございます」であることは、しつかり感しさせなくてはならない。

わたし達は、新聞やラヂオの報道などで、戰地第一線の正月のほゝえましい話を聞くことがある。敵を目の前にして、武裝も解かないまゝで、しかも正月を正月として迎へて餘裕しやく〳〵と興じてゐる勇士達である。殊に、戰陣の邊土の異物を工夫し趣向して、正月らしい形と氣分とを出すところは、月並の正月風景よりも却つて一段の妙味さへ添ふのである。そして、その一と時を、故郷の心になり、恐らくや、子どもの時の心になり、無邪氣な笑ひを顏面一ぱいに浮べて、正月のすが〳〵しい心になりきるのである。なんといふ、嚴肅の中のほゝえましさであらう。ほゝえましい嚴肅であらう。これと同じといふのではないが、幼い子らの戰下のお正月の、嚴肅とほゝえましさも、聊かこれに似ると

ころがあるといへようか。

兎に角く、子どもにとつて、その年齢の正月は一生一度である。それを、この嚴しい戰下に迎へるのも、なんといふ意味深いことであらう。その意味深さを思つて、おろそかにしないようにしてやらう。それにしても、この戰下にすく〳〵として成長を遂げさせられてゐる幼兒らのために、彼ら自らは何も知らない感謝を、深く心にしめながら、方に加へられてゆく、その貴い一歲を祝福してやりたい。

幼兒集團疎開について

森　脇　要

恩賜財團大日本母子愛育會の二つの幼兒の保育施設卽ち戸越保育所と愛育隣保館の集團疎開の計畫が毎日新聞に出てから、私は見學の申込や照會の手紙を澤山貰つた。幼兒敎育の編輯者からも、この計畫や抱負や趣旨を知らせるようにとの依賴を受けたし、がし事は尙その途中にある。まだやつと先發隊の幼兒十四名が、疎開先で生活を始めたばかりであつて、まだ〳〵疎開を語るべき時ではないのである。併し敵機の帝都空襲は開始されており、幼兒の疎開は一刻を爭ふ狀態となつてゐる故に、敢て我々の計畫を幼兒敎育に關心さられる人々や直接保育擔當の保姆諸君に訴へ、幼兒の集團疎開計畫の國家的に取上げ、實踐されん事を、共に協力されん事を願つて、この筆を取つたものである。

我々が戸越保育所の集團疎開を計畫し始めたのは、既にこの五月、東京都で幼稚園或は保育所の休園、或は戰時託兒所に切替への問題が起つた時に始まる。幼稚園や保育所で、幼兒を集團的に保育する事の危險が考へられるならば、戰時託兒所と言へども早晩休止しなければならぬ時が來るであらうし。而もそれはそれ程遠い將來ではないと我々は考へた。而も戰時託兒所の子供は、戰力增强上どうしても家庭より託かる事が必要であるとすれば、戰時託兒所全體を安全なところに移して保育しなければならぬと考へた。これが幼兒集團疎開の第一の理由である、そして七月一日より戰時託兒所として切替へ、再出發しつゝも一方疎開の方向に努力を續けた。

第二の理由は戰時託兒所と必ずしも限らず一般に幼兒を疎開する一つの手段として集團疎開を計畫した。幼兒の疎開は私は三つの大きな意味があると思ふ。その一つは誰もが、すぐ氣付く樣に、第二の國民たる幼兒を敵の空襲から守る事である。次の理由は、幼兒を疎開させる事によつて、母親が防空、待避、消火の活動の自由を得て、空襲下の家庭を守る責任を充分果す事である。第三

の理由は、これはあまり今迄説かれない點であるが、幼兒を疎開させる事によつて、一人一人の母親や父親が戰爭を文字通り自分の戰爭と感じて、この戰爭を貫徹するために主體的に積極的に一層の力をつくす樣になる事である。これは子供を疎開させた事のある父親や母親なら直ちに氣付く點である。子供を安全なところに託し、身を自由にして、職場に積極的に努力するとき、そこに自ら必勝の信念が生れて來る。總理大臣の言はれた國民總武裝は、こうした心構へを言ふのであると思ふ。

併し幼兒の一般的疎開はそれ程簡單ではない。政府は緣故疎開を說くが、それは既に限度に近い。殘された道は集團疎開以外にはない。それ故どうしても先づ差當りは、大都市の戰時託兒所や幼稚園の組織を使つて、これを集團的に疎開させるより他に方法はないと考へた。併し果して幼兒の集團疎開は可能であらうか、殆ど凡ての人々は、とても不可能であると言ふ。日本の母親は絕對に子供を離さないといふ。

六月早々我々は保育所の母親達に、「若し保育所が疎開すれば、御子さんを一緒に御出しになりますか」といふ質問を出したところが、三分の二程度の母親から「疎開させます」といふ返事を受取つた。母親達の氣持は、非常に積極的に疎開させたいといふ氣持ではなかつた。併し今迄保育所に通つてから子供がどん〳〵よくなつてゐるので、この先生方になら安心して子供をおまかせいたしますといふのである。

母親は必ずしも疎開に贊成ではない。然しこのよい保育所から離れて、又子供が母のゐない間、街頭での生活をくり返す事を考へると、どうしても疎開させなければならぬと考へたのである。疎開の必要感より子供を離すのではなく、保育所に對する信頼感より子供を離すのである。集團疎開を考へるものゝ注意すべき點であらう。

我々は一般の人々の意見とは反對に集團疎開の可能を信じた。我々が先づ集團疎開を實現する事によつて、その可能を示し、次に同じ道を歩かうとする人々の先達とならうと決心した。

研究所の岡部教養部長の贊成を得、愛育會當局に再三願つた。幸ひ我々の希望は段々と實現し始めた。特に本會の今宿理事は、初めよりよく我々の希望を聞いて下さり、積極的にこの目的の實現に努力して下さつた事は、何よりの感謝である。こうして齋藤常務の英斷により疎開保育園費の豫算の實現となり、我々の活動が具體的となつた。

疎開先の決定も大變な仕事であつた。保姆も東奔西走して疎開先きを捜したが、なか〳〵見付からなかつた。幸ひ廣瀨隣保館長の御骨折で、埼玉縣南埼玉郡平野村字高蟲に格好な場所を得た。桶川驛より六キロの里程にある寺院を借り受けたのである。

疎開豫算は幼兒を大體五十から六十人見當として、五萬四千圓程度である。それ故幼兒一人當りとすれば八十圓から九十圓見當を必要とする事になり、集團疎開はなか〳〵個人的な施設ではこれを實行する事が困難であり、この點よりは、どうしても國家の大きな援助が願はれるのである。

この幼兒の集團の世話は保姆七人、保健婦一人榮養士一人雜役三人で以つて行はれる事が原則になつてゐる。幼兒四人或は五人

に一人の割合である。而も幼兒の保健に關しては、研究所の保健部の宇留野博士が一週一回出張して、健康管理の責任をとつて吳れる事になつてゐる。

而して今宿理事の創案にもとづき疎開先きの人々との融和をはかり、疎開保育園の幼兒の生活物資の援助の爲に、平野村の人々を中心として疎開保育園援護會が形成され、物資の買入、斡旋は、專らこの援護會を通じて爲される樣になつてゐる。このために、疎開先きの保姆が、食糧の爲に、方々をとび廻るといふ事のないようになつてゐる。

疎開保育園の運營に關しては、愛育隣保館と戸越保育所の鈴木、畑谷兩主任保姆が合議制で運營して行く事になつてゐる。

以上の樣な趣旨や組織で今疎開が行はれてゐる。まだ修繕の工事は完成してゐないが事情が逼迫したので十一月二十五日に先發隊十五名が出發したのであつたが、その前日たる二十四日に最初の空襲があつた。一日も早く疎開をといふのが凡ての母親の希望となつた。先發隊十五名は豫定の如く出發した。準備が未だ不充分なので保姆の苦勞は大變であるが、子供達は實に元氣である。銀杏樹や紅葉の木の紅葉してゐるのを見て、「何てきれいなところへ來たんでせうね、よかつたねー」と心から喜んでゐる。

疎開が計畫されてから今日まで約六ケ月かゝつた。その間實に保姆達はよく働き、よく工夫し、よくねばつた。この保姆達の子達への愛情が遂に、多くの人々を動かして、今日の疎開計畫の實現にまでなつたのである。戸越保育所の畑谷、山田、福光、伊井、森村、隣保館の鈴木、中村、福知の努力は充分賞讃されていゝと思ふ。

疎開はまだ始つたばかりである。明日は又戸越保育所の幼兒二十五名と、隣保館の幼兒七名が疎開先きに向つて出發する豫定である。

私が今こゝで考へて見ただけでも既に五指に餘る大きな困難が考へられる。併し私は、今迄多くの困難に耐へて來た保姆達の强い意志と創意を知る故に、充分安心してゐる。必ずや凡ての困難を克服して、所期の目的を實現して吳れるであらう。

我々は斷じて戰ひ拔かねばならぬ。老人や乳幼兒は斷じて安全な場所に疎開されねばならない。我々は先發隊として出發する。私は多くの後續部隊の續く事を信じ、そして祈つてゐる。保育關係者は十二分の熱意をもつており、保姆も又、まれに見る幼兒の愛情と幼兒管理の能力をもつてゐる。保姆達は自分達の疎開への意志の正しい事を信じ自分の能力を十二分に自覺して、所期の目的に向つて突進してほしい。當局者に願ひたい事は幼兒疎開の困難性を云々する前に、この日本の保姆達の熱情とその能力とに信賴してほしいと思ふ。日本の保姆達は實にこの困難な仕事に耐へる事が出來る。我々の保姆は母として生れ、戰場の第一線に於て果し得ない奉公の熱情を疎開先きに於て實現しつゝある。我々はもつと保姆の能力を信じてよいのではないか、そして又保姆自身も自分の能力をもつともつと高く評價する事が大切であると思ふ。

私は、この疎開に際して大きな二つの發見をした。一つは幼兒を母親から離して管理する事は一般の期待に反して比較的容易であるといふこと。第二は保姆の能力が一般の豫想や、保姆自身の

自覺よりもはるかに高いといふことである。我々はもつと、この保姆に信頼して仕事を進めるならばこの困難な問題もどん〳〵進展させる事の出來る事を信じて疑はない。（十九、十二、一、）

（筆者は愛育會研究所員、戸越保育所長）

凍傷の常識

勝又佼一

凍傷

これからの冬期に幼兒學童を苦しめる凍傷の病理と其の豫防法及誰れにも出來る療法とを御參考迄に述べて見たい。特に近年は榮養失調特にヴタミン不足等により本症の發生が非常に多くなつたことは今冬期に向つて一段と注意すべき季節的疾患の一つである。

凍傷發生は原因は兒童の體質により同一寒冷に同時間作用されても同程度の凍傷が起るのではなく、體質に依り著しく凍傷の程度を異にするが大體次の三程度に分けられる。

一、第一度凍傷又は紅斑性凍傷

冷氣が長く作用すると、先づ皮膚の貧血を來すが次で鬱血を來し次第に紫藍色をとなり、暗紅色に腫脹して來る。之を凍瘡（シモヤケ）と云ふ。これは殊に夜間あたたまると激しい瘙痒（カユミ）を來す。

二、第二度凍傷又は水疱性凍傷

これは凍瘡の上に水疱を生じ破れて糜爛面或は潰瘍を形成し、膿汁を出し或は痂皮を附着する。

三、第三度凍傷又は壞疽性凍傷

これは强度の寒冷が作用し無感覺となり、局所の血行停止を來し暗褐色の壞疽部を生じ幸ひに經過すれば局所脫落を來し時には不幸死に至ることがある。一般には極寒地に居住する者、冬の登山、スキー等に行く時は特に注意すべきことである。

凍傷は手指、足趾、耳翼等に多く發生し、幼兒、年少者は大人よりも罹り易く、特に貧血性者、心力弱い者、腺病質の者、脚氣になり易き者は特に注意しないと凍傷を起す故に斯樣な體質の者は平生より肝油、鐵劑、ヴタミン劑を與へて勉めて强壯ならしめ冬期に向へば、手袋、足袋を用ひて溫包し、皮膚は常に乾燥に保つ樣注意する。

療法　不幸第一度の凍傷發生したならば家庭療法としては毎日一—二回局所の溫浴を行ふ。時間は一〇分前後特にこの湯を「トウガラシ」を水一升に二本程度入れて煮した湯で行ひ浴湯中能く摩擦するのは頗る有效な方法でこの方法で凍傷を少くとも第二度

に進めない樣にすることが重要である。第二度となると今日有效なる藥劑の入手困難で且つ家庭療法も困難である故にぜひこの方法をすゝめたい。其他簡單には四五倍の沃度丁幾、ルゴール氏液カンフル丁幾を一日三—四回塗布する特に前記の溫浴後に行ふと更によい。

第二度、三度凍傷は醫師の治療を受けるのが無難であるが、參考迄に次に處方を記して置く故、藥局にて調劑出來たら試みられたい。

第一度凍傷

ヨードチンキ	二・〇
タンニン酸	一・〇
カンフル精	二〇・〇
グリセリン	五〇・〇

右爲塗布料

第二度凍傷

硝酸銀	〇・二
ペルーバルサム	五・〇
單軟膏	五〇・〇

右爲軟膏

第三度凍傷

カンフル	三・〇
タンニン酸	二・〇
ペルーバルサム	一〇・〇
グリセリン	五・〇
單軟膏	五〇・〇
薄荷油	一〇・〇
カリ石鹼	二〇・〇

右爲軟膏

其他毎年冬期になると必ず凍傷の發生する者に凍傷の起る冬の始めより太陽燈、レントゲンの照射を受けると大へん豫防的に有效に作用する者もある。

寒冷が急に作用し知覺を失ひ或は失神せる者には急に溫めることなく先づ雪塊或は布片を以て摩擦し徐々に溫める樣にすることが大切で、出來れば酒、コヒー等の興奮劑を與へる。以上

（筆者は勝又外科醫院長）

お願ひ

○本會へ振替にて御送金の場合は、必ず振替料金拾錢を御加算下さい。

○從來は誌代として一册につき參拾五錢だけ頂いて居りましたが、昭和十九年四月分から誌代の外に特別行爲稅參錢、送料貳錢、合計四拾錢を申し受けて居りますから御諒承下さい。

昭和十九年十二月

日本幼稚園協會

日なたの畑（二）

及川ふみ

お正月の休みが終つて、第三學期の始業の日が來た。しばらく會はない幼兒たちの顏を見るのも樂しみだし、山の上の畑の作物の樣子も見たくもあるので出かけてきた。

キャベツ、ゑんどうも一本の損じもなく小い乍らも生々としてゐるので安心した。

廣い開墾地にはやつと前記のキャベツ、ゑんどうの二種類が植ゑられてゐるだけである。あいてゐる場所にはこれからジャガイモ、南京豆、ツルナ、南瓜、などの作物の豫定が立つた。

この三學期の寒い間の、大人と幼兒の共同農耕は先づジャガイモ畑の地ごしらへである。

石や瓦のカケラの片は大體一通りはすんだわけであるが雨が降つたり、少しでも掘つて土を動かすとたちまち石ころが出てくる。土を掘つて柔かくしながら肥料を入れては土を柔くする。石ころを拾ふ。幾度かこの仕事を繰りかへした事である。

三月二十五日本校の卒業式の日、卒業生を送り出した後、約三貫目ばかりのジャガイモの種イモを私共保姆だけで植ゑ付けた。こんなに植ゑ付けをすると植付月日を記しておかなくても忘れやうにも忘れられない氣がした。すつかり地ごしらへを手傳つてもらつた保育科の生徒たちも巣立つていつた。

南京豆の植付

四月になつて次の作物、南京豆の植付の準備にとりかゝる。

今まで幼稚園で豆類を蒔くといつも鳥にとられてしまふ苦い經驗があるので、去年の秋のゑんどう豆も直蒔にはしなかつたが、南京豆など尙更のことである。學校の園藝場の畑に小さい鉢に一粒づゝ入れて芽の出るのを待つことにした。ところがこゝにも鳥の眼がとゞいて約半數は荒された。仕方なしに大急ぎで補ひをつけて、今度は小さい鉢は溫室の中に入れて植ゑつけの後れるのを少しでもとりかへす爲に急いだ。

小鉢に入れた豆が芽を出し、根が鉢の底まで廻るまでは南京豆の地ごしらへである。三尺おきに一つづゝ一尺あまりの穴を掘つた。この穴を六十掘つた。この穴に肥料を入れ、その上に柔い土をのせ或る時は灰を入れた。植ゑ付數、六十株の南京豆の爲の地ごしらへである。植ゑる場所を全部こんなに耕すのは容易でなく植ゑ付に間に合はないので植ゑる迄まはり丈さしあたり用意したわけである。豆の芽が十センチ位のびた時に鉢から地へおろした。移植の出來ないものを植ゑうつす時には小鉢に水をやつて土をかためてからトン〳〵數回鉢のまわりをたゝいて掌の上に倒にすると鉢の形のまゝの土がついてそのまゝ靜かに土におろすのである。

四月五月と暖い日が續くと、キャベツの生育も目立て來た。それと同時に蟲の害もなかなか油斷が出來ない。一うねづゝ各組

の分擔をきめて蟲取りを充分にする事にした。青蟲、夜盜蟲など毎日〳〵取つてもとりつくせない。五月に入るとどの葉も急にまき出した。かつて幼稚園の丸花壇に十株位キャベツを植ゑた事があつたが、一つも葉が卷かないで、葉牡丹の樣になつた。こんな經驗のもち主であるから七十近くのものがほとんどまるく葉が卷くので不思議な樣な氣もした。ほんとに夢の樣にうれしくなつた。土もよい、日當りもよい、苗もよい、手入もよい(これはどうですか)とにかく三拍子揃つた結果であらう。こう順調に生育して來ると、蟲取りは尙更おこたつてはならない。東京邊の幼兒はキャベツと云へば臺所にある丸いかたまりとしか考へない。この偉大なる葉の中央にあのキャベツがついてゐるのかと始めて眼を見ばつた樣であつた。

キャベツの收穫

かたく卷いたキャベツを先づ一つとつて海の組の幼兒たちにお辨當の時のお汁を作つて食べさせた。鹽で味をつけお醬油はほんの色つけ位に入れた簡單なお汁であつたがとにかく幼兒たちは喜んでくれた。三杯もおかはりして大喜びでたべてくれた。海の組の幼兒たちに試食してもらつて喜ばれたキャベツ汁は次々の全園の幼兒たちの晝食のお汁として賑かにつゞいた。幼兒たちを喜ばさせた後、この三月卒業した保育實習科の生徒さん達の勞も報いたい。六月二十五日　皇太后陛下の御誕辰祝賀式は丁度日曜日と重つた。園藝の大岩先生、名和さん方にも御出席願ふ事として在京の卒業生に案内を出し、キャベツ料理をすゝめる事にした。調味料は各自少量づゝ持參する事にして、とにかくキャベツの味噌汁、鹽もみ、いんげんの煮付など三種類のお皿盛りが出來上つた。お料理の味は味そのむよりも自分たちが丹精したものといふので何倍かの美味を添へたのである。歸りには各自キャベツのお土產をもたせた。大小輕重いろ〳〵あつたが收穫の時一つ一つ目方をかけてその重さを計つたのであつたが八百匁位が最高の出來であつた。專門家の一個二貫目もあるものなどに較べれば問題にもならないわけであるがとにかく始めてキャベツを作つた素人としてはこれで一寸滿足した。又七十株植ゑ付けたキャベツの中一株だけ始めに枯れてしまひ、三株ばかりが葉牡丹の樣になつた以外はみんな、とにかくキャベツらしく丸くなつた丈けでもうれしいことであつた。

人形芝居雜記

安村ふさ

戰局は如何に嚴しからうとも、こども達の初春を待つ心には些かの曇りもなく明るく輝かしい。暮から新春にかけて專ら家庭の子として戰時下許される限りの樂しい和かな毎日を送つた彼等を扨、私はどんな風に迎へようか。どんな風にして喜ばせようか。かるたや双六を作つて遊ばせるのもお正月らしく面白いが、子供達をつとりばやく喜ばせたい私の氣持は、先づ人形芝居で、と思ひつく。こども達は人形芝居がと

ても好きである。どんなこどもでも喜ばないものはない。人形芝居上演の事が定るとその待ち焦れ樣はいぢらしい程である。

扨、讀者の方々には人形芝居の玄人の方も多いと思ふが、新しく始めようといふ方方に幾らかの御參考にもと思ひついた事どもを述べてみよう。

先づ舞臺であるが、私共の園では以前から專用の移動組立舞臺があり、數人の使ひ手が中に入つて人形を動かす事が出來る樣になつてゐる。併し、今からでは到底その樣なものは望めないから、めい〳〵自分の周圍を見廻して工夫するのが早道である。衝立の上部を舞臺にするのは最も普通な方法であるが、衝立のない場合は戸や障子を横倒しにしても結構である。又單に細長い机の廻りを布か紙で覆ひ、その上でしても差支へないし、廊下と室の間の硝子窓の所等も利用し得る。尙オルガンがそのまゝ使へる場合もある。そして極く簡單に背景なしでも素撲でよいが壁か屏風を利用して、それに貼り得れば效果は一層上る。背景は道のある野原の風景、森の中、庭、室內の場、海邊の風景等、極くありふれたものを描いておくと、いろ〳〵の場合に重寶に役立つ。尙紙がどうしてもなければ、黑板に（能舞臺式に）全體に通ずる氣分を表した畫を描いておくのも一方法であらう。

扨、次に人形はどうすればよいかといふと、端布となるべく丈夫な紙を利用して作るのが手頃であらう。人形の頭は、顏の形に切つた二枚の布で作り、中に適當なつめものを固くし（指を一本入れる餘裕を殘しておく）墨で目鼻、髮等を描く。此の下部に着物を着ける。着物は手の幅より稍く大きめの幅で手首邊までの長さの袋の形を原形とするのが最も簡單でやりよい。人形の手を兩端につけ、中に使ひ手の指が入る樣にする。布の色あひはなるべくそのものらしいもので無地の方が印象的であるが、あり合せで構はない。又布が足りない場合には紙に彩色して布と同じ樣に取扱つても結構間にあふ。人物でも動物でも以上の要領で頭部丈そのものらしく作ればよいのである。その他背景におく物はそのものらしく紙に描いて切拔くか立體的に作るかする。

最後に脚本であるが、それの製作には十分な注意を要する。讀んでみて、よく出來てゐると思ひ、扨上演してみると大層工合の惡い場合がある。こゝで、人形芝居は一つの演劇であつて、劇はみる動作である等と尤もらしい言ひ方をしないでも、動作による表現が主體となるものであるから、文章は其に適應して作られねばならない。そして童話を脚本化するに當つては幼兒がよく知つてゐるものを選ぶのが大切で、劇的な要素を持つ部分を演出する樣心がける。

尙、人形の使ひ方は、首に入れた指は大概の場合固定し、兩手を絕えず表情をつけてゐる樣に心を配つてゐれば、たとへ下手でも、人物が躍動してみえ、幼兒は生あるものとみてくれる。

扨、脚本の一つを御參考までに揭げる事にしよう。

カチ〳〵山

第一場　畑、

背景。大根やさつまいもの畑

登場人形、その他。

お爺さん、お婆さん、

狸＝前述の要領の袋人形の腹部に白い布を縫ひつけ中につめものをしてふくらます。

お日様、お月様＝何れも畫用紙で平面に、
わな＝一つ結んで環にした紐を舞臺の中央に置く。
――幕あく――
舞臺の右からお爺さんお婆さん出て來る。
婆「おや〳〵つ、お爺さん、又大根が抜かれてゐますよ。これはきつとあのいたづら狸の仕業に違ひありませんよ。本當にしようのない狸ですねえ。」
爺「うん、昨日は、わしが大事に〳〵にしてやつと實らせた葡萄をみんな食べてしまふし、今日は今日で自慢の大根を嚙つてしまふなんて、あの狸奴、今夜こそはわなをかけて捕へてひどい目に會はせてやらう。婆さん縄を持つて置いで。」
婆「はい〳〵。」（右に引込み縄を持つて來る）「今度こそはうまく引つかゝる樣なのを作つて下さいよ。」
爺「（渡された縄は下に落し、蓑の下の用意の縄を持ち上げ乍ら）ほらこんなにいゝのが出來たよ、これならきつと引つかゝるだらう。明日の朝は早く來て、うんと懲らしめてやらう。」
（お爺さんお婆さん右に入る。此の頃よりお月樣が昇り始める。左から狸が踊つゝみしながら出て來る）
狸「スッポン〳〵　スッポンポン、スッポン〳〵スッポンポン、
あーア、いゝお月夜だなあ、お爺さんの畑で今夜は何を食べようかな。一昨日の葡萄、おいしかつたなあ、おいしくつて〳〵頻つぺたが落ちさうだつた。それに昨日の大根も太くて本當においしかつたなあ、（少し進む）おや、此はお誂だぞ、うまそうだなあ、今晩は此のお誂をどつさり御馳走になるとしようかな。ムシャムシャ、ムシャ〳〵おいしいなあ、ムシャ〳〵（だん〳〵わなの方に進む）おや、此れは仲々抜けないぞ（とわなのわの中に手を入れる。途端に下から紐の兩側を引つ張るので結ばれてしまふ）アッ!!　痛い!!　手がぬけないよう。アーン〳〵　痛いよう〳〵。助けてくれ〳〵、お爺さん助けて下さいよう。ねえ、お空のお月樣、そんな所でみてゐないで僕を助けてよう。」
月「人のものをとる樣な惡い子は助けて上げる事なんか出來ませんよ。惡い事をするとね、神樣はちやんと見ていらつしやるんですからね。」
狸「いゝよ、助けてくれない樣なお月樣なんか引込んじやへ。お月樣の意地惡。」
（お月樣だん〳〵下る）
あーア途々引込んぢやつた。つまらないなあ。誰か助けてくれないかなあ。痛い〳〵。
（お日樣がお月樣より少し横から出て來る。）
あつ、お日樣だ。お日樣〳〵、僕を助けて頂戴。このわなからはづして下さい。」
日「お前はいたづらをしたんだね。お前の樣ないたづら者はさうやつて痛がつてゐるが良い。わしはね。正しい者は助けるけれど、いたづら者は助ける事は出來ないよ。」
（お爺さん右より出て來る）
爺「いたづら狸奴、遂々わなにかゝつたな。どれ〳〵一つ家に持つて歸つて今夜はおいしい狸汁にでもして食べるとしようか。」
狸「お爺さん、もうしませんから、どうか許して下さい。」
爺「だめ〳〵。お前のいふ事なんか聞けないよ。どれ、どつこいしよ。」
（右に引つ張つて行く）　幕

第二場　お爺さんの家

背景、田舎家の土間

登場人形

お爺さん、お婆さん　狸

兎＝白兎に赤い袖無を着せる。

――幕あく――

舞臺中央に狸が吊されてゐる。下手にうすがありお婆さんは杵を持つて用意してゐる。

婆「お爺さん、今日は丁度お祭りだし、一つお餅でもつきませうかね」

爺「うん、それに今日は狸汁の御馳走もあるし、どれ〳〵わしは、一つ山に行つて柴を刈つて來るとしようか。」

婆「ぢや、私はうんとおいしいのを作つて置きますよ。いつていらつしやい。」

爺「（右に入りかけて）行つて來るよ。狸奴を逃がさない樣にしなさいよ。」

婆「はい〳〵。」

（お爺さん右に退場、お婆さん餅を搗き始める。）

婆「ペッタン〳〵お餅つき、今日はお祭りお餅つき、ペッタンおいしく作りませう。ペッタン〳〵ペッタンコ。

あーア、くたびれた、年を取ると直ぐに腰が痛くなつて、（腰を伸ばして、又搗き始める。）ペッタン〳〵ペッタンコ。

（狸上から聲をかける）

狸「お婆さん〳〵」

婆「ペッタン〳〵ペッタンコ」

狸「お婆さん〳〵」

婆「（邊りを見廻し乍ら）誰だえ、私を呼んでゐるのは」

狸「おばあさん、私ですよ、狸ですよ。あのね、お願ひだから少し此の繩をゆるめて下さいませんか。痛くて〳〵たまらないんです。

婆「だめ〳〵、私はお爺さんにちやんと言ひつかつてゐるんですからね。それに此のお餅を早く搗いてしまはなければ、ほら、ペッタン〳〵」

狸「おばあさん、お疲れでせう。僕が一寸の間お手傳ひをしませう。僕ね、本當に惡かつたと思つてゐるんですから、ほんの一寸、一寸の間でいゝんですから此の繩を解いて下さいませんか。

婆「さうかい。本當に手傳つておくれかい。ぢやね、お爺さんには内緒でほんの一寸丈ほどいて上げよう。どれ〳〵（杵を置いて右に行き繩を解くと狸は丁度白の後あたりへ下りる。）さあ解いてあげよう。本當に手傳つてくれるんだね。仲々ほどけない。（といひ乍ら紐を解き其の間に狸の後から手を入れる）ほら解けたよ。」

狸「（手をうーんと伸して）あーア痛かつた。お婆さんどうもありがたう。」

婆「ぢやあ私は一寸休んで來ますからね。あゝくたびれた。（右に入りかける）」

狸「此の杵で搗くんですね」

婆「あゝそうだよ。ぢや賴みますよ。」（右に入りかけると狸が杵で打つ）

狸「此のばゝあ奴。よくも僕を痛い目に會はせたな。お手傳ひなんかしてやるもんか。

あゝひどい目に會つた。お爺さんの歸つて來ない中に早くお山に歸らう。

（狸左に入る。暫くして兎左から出て來る。）

婆「ウーン〳〵」

兎「今日は、お爺さん、お婆さん、今日は。おや、お二人共お留守かしら。あつ彼處に倒れてゐるのはお婆さんぢやないかしら。（お婆さんの傍へ行き）お婆さん〳〵兎ですよ。おばあさん誰です、こんな事をしたのは。」

婆「兎や私はひどい目に會つたよ。お爺さんの留守に、繩でしばつておいた狸の繩を一寸ゆるめてやつたら杵で私をなぐつてどん〳〵逃げて行つてしまつたのだよ。本當に憎らしい狸だよ」

兎「あの惡狸奴!! 私の大事なおばあさんをひどい目に合はせて、おばあさん、御安心なさい。私がきつと仇を討つて上げますからね。ぢや早速お山に行つて狸を探してうんと懲らしめて來ませう。ではおばあさん、行つて來ます。」

婆「しつかり賴みますよ。」

兎「はい。行つて來ます。」

（兎左に退場）　——幕——

第三場　カチ〳〵山

景背　山の峠道

登場人形　狸、兎

——幕あく——

左より兎と狸が柴を背負つて出て來る。

兎「狸さん。今日は本當によいお天氣ですね」

狸「うん、柴も澤山とれたし、兎さんに誘はれて柴刈りに來て本當に良かつたなあ。」

兎「お背中も大分重くなつたし、今日は日の暮れない中に早く歸る事にしようかな」

狸「そうだね」

兎「ぢやね、歌を唄ひ乍ら歸らうよ。」

合唱（夕焼け小焼けで日が暮れて……）

（兎歌をやめて「カチ〳〵」と手を打ち合せる）

狸「兎さんカチ〳〵と音がする樣だけど何だい」

兎「こゝはね、カチ〳〵山つていふお山なんだよ。だからカチ〳〵音がするんだらう。」

狸「成程、珍しい事があるんだね。カチカチ山つていふのかい。」

合唱（山のお寺の鐘がなる）

（又「ボウ〳〵」音がする）

狸「何だかボウ〳〵音がするけど何だい。」

兎「あのお山がボウ〳〵山つて云ふんだよ。だからボウ〳〵音がするんだらう。」

狸「面白いお山だね。（少し進む時に赤い眞綿を柴の上につける。）あつ、あついよ〳〵兎さん背中がとても熱いよ。助けてくれ！　あつ！　あつつ、あつつ、……（逃げ込む）」

兎「はあ……惡い事をするからだよ。」

——幕——

第四場　狸の家

背景、田舍家の室內

登場人形　狸、兎

——幕あく——

舞臺中央澄りで狸が囲炉に寄りかゝりうん〳〵苦がつてゐる。

狸「あゝ痛い〳〵。背中中がピリ〳〵痛い。うーん〳〵。」

兎が藥箱を背負ひ「日本一」の旗をつけて出て來る。

兎「日本一の藥屋。とても良く效く藥。日本一の藥屋。

狸「藥屋さん〳〵。その藥は火傷にも良く效くんですか。」

兎「えゝ、何にでもとても良いのですよ。火傷なんか直ぐに治りますよ。」

狸「では一つ背中に塗つて下さいませんか。痛くて〳〵たまらないんです。」

兎「まあどうなさつたんですか。（と狸の袖無しを脫がせる）まあ〳〵此では痛いでせうね。」

狸「えゝとても痛いのですよ。」

兎「此は「辛子」といつて一寸しみますけれどとても良く治りますよ。」

狸「あつ……藥屋さん、痛い〳〵止めて下さい。とても痛い、あつ……」

兎「此は澤山ぬらないとだめなんですよ。もつとぬつて上げませう。」
狸「もつとですか。痛いなあ〳〵」
兎「よいしよ〳〵、もつと〳〵ぬりますよ。」
狸「あつ……此はたまらない、もう澤山ですよ。」（逃げ込む）
兎「やーい〳〵」

——幕——

第五場　舟

背景　濱邊
登場人形　狸、兎

——幕あく——

（舞臺前面に波が出て居り右の方が一寸濱邊になつてゐる。濱邊には兎が木と泥の舟を作つてゐる樣子舟は下に持つ所が着いてゐて其を下から動かす仕掛になつてゐる。）

兎「あゝ漸く出來たな、早く狸が來るといいな。」
狸「兎さん今日は、面白さうだね。何を作つてゐるの。」
兎「あゝ狸さん、今日はね狸さんと舟遊びをしようと思つて今朝から一生懸命に作つてゐたんだよ。丁度いゝ所だ。やつと出來たから乘らないかい。」
狸「え、乘つてもいゝの？　嬉しいなあ。」
兎「ぢや僕は此の舟に乘るよ。（木の舟に乘る）狸さんは其方の舟にお乘りよ。」
狸「うん、此かい、いゝお舟だねえ。」（泥の舟に乘る。兎狸、波の上に出る。）
兎「向ふの島までどつちが早いか競爭しようよ。」
狸「よし」
（二人　ギッチラコ〳〵　狸の舟は泥の舟、兎の舟は木の舟、ギッチラコ〳〵　と歌ふ）
狸「兎さん、何だか此の舟沈んでゆくみたいだよ。」
兎「そんな事ないよ。僕が一生懸命作つたんだもの。さあ急がう。」
（二人、ギッチラコ〳〵）
狸「あつ、水が入つて來た。あつ、舟が沈む。兎さん助けて〳〵。」
兎「あは……狸さん、君はおぢいさんの畑のものを食べたり、おばあさんをひどい目に會はせたりしたね、今日は思ひきり苦めて仇を討つてやつたんだよ。」（その間狸は云つてゐる）
狸「兎さんごめんなさい、僕もうこれからは決して惡い事をしませんからどうぞ助けて……アップ〳〵」
兎「本當にしないね。それなら此に捉つて僕の舟にお乘りよ。」（狸欄に捉つて舟に乘る）
狸「あゝ良かつた。兎さん本當にごめんなさいね。僕ね此からおぢいさん家に謝りに行くよ。一緒に行つて呉れる？」
兎「あゝ、それぢや一緒に行かう。此からは皆で仲よくしようね。ぢや早く歸らう。あ、よかつた。」
（二人ギッチラコ〳〵と元の濱邊に戻る中に幕）

（筆者　附屬幼稚園保姆）

春を待つ

志村貞子

春を待つ子供達の心は、昔も今も變らない。荒鷲として羽搏く日の夢は昔の子供達

より一層切實に持つてゐようとも―。否、その夢を實現すべく「大きくなること」が一層嬉しく、一層待たれるのであらう。決戰下、お正月らしい御馳走はなくとも、お正月らしい物はなくとも、「大きくなること」に喜びを感じ、誇を感じる彼等の心は明るく大らかである。決戰下のお正月を迎へるが故に、一層さうである。この伸びゆく明るい、元氣に溢れる子供達のある限り、日本のお正月は常に輝かしい。一年は一年と年毎に新しい大きな希望に充ちてゐる。「今の若い者」と提督の恃み仰せられたその幾多の立派な若い者に續くべく、更に更に若い者が「大きくなる春」を待つてゐる。何といふ力强い、嬉しいことであらう。そして何といふ有難いことであらう。

× × ×

朝毎に嚴しくなる寒氣にもめげず、子供達はその元氣な赤い頰を一層赤くして「お早う」と駈け込んでくる。その元氣さは、煖房の部屋に迎へられたその昔の子供達に比べて一しほ逞ましい。お辨當の御飯の冷たさが齒にしみ、身體にしみるやうになつてきた。そしてそのお菜も何年か前の子供達程惠まれてはゐない。けれどもお辨當を皆でいたゞく愉しさは相變らずである。この子供達と共にゐて、火のない部屋を寒くとさせ、物の乏しさを歎く大人があるとすればこの子供達の明るさ、逞しさに慚ぢなければならない。子供達は誤つた同情心を喜びはしない。お餅の少いことを云々する前に、お餅を祝へる有難さを感謝しよう。否、お餅がなくとも、何がなくとも、生けるしるしある大御代に、日本人の一人として新たな齡を重ねることに何より大きな喜びがある。それはそのまゝ子供達の春を迎へる素直なよろこびの心に通じる。冬にゐて春を待つ心である。

× × ×

「お正月が來ると凧をあげたり双六したり」の歌の詞のやうに、「お正月には何をして遊ぶの？」ときいてみると、凧あげ、双六、羽根つき、かるたとり、と子供達はいつもながら愉しいお正月の遊びを心にゑがいてゐる。或る一日、お正月を待つての話あひから、皆で遊ぶかるたを皆で、双六を皆で作りませう、といふことになつた。

かるたは、古いかるたの、裏へは丈夫ながら讀み札の言葉がふさはしくないと思はれるのでこれまで藏つてあつたのをとり出して、古い畫用紙の白い裏などを貼つてこゝに字を書き繪を描く事にした。詞は皆で相談して決まつたのから一人づゝ受持つて繪を描いたり、字を入れたりしてゐる。イツモニコニコゲンキナコ。ロバノキヤウダイナカヨシコヨシ。ハツパガヒカル。ニツポンハツヨイ。かうして子供達の新しいかるたが一枚一枚生れてくる。そして知らず〳〵文字への興味も生れてくる。

又、こちらの一隅では、ポスターを、或は包紙を臺紙にして、乘物づくしの、花づくしの、動物づくしの、また飛行機づくしの双六の繪が一枚一枚出來上つては貼り込まれてゆく。やがて皆でかるたをよみあげ、さいころを振る日をたのしみながら。

「あといくつねるとお正月」子供達と共に春を待つこの部屋は明るくたのしい。

（筆者　附屬幼稚園保姆）

東京女子高等師範學校
保育實習科入學募集

（十一月二十四日官報　文部省告示拔萃）

第一　募集人員

一、募集人員　約三十名

第二　選拔期日

一、出願期日　昭和二十年一月十日より同月二十日迄
一、第一次選拔結果發表　昭和二十年二月九日
一、第二次選拔施行
（イ）筆答試問及實技調査　昭和二十年二月二十一日
（ロ）實技調査人物考査及身體檢査
昭和二十年二月二十二日
一、入學許可者發表　昭和二十年三月一日

第三　選拔要項

一、入學者選拔の方法は之を第一次及第二次に分ちて行ふものとし第一次に於ては出身中等學校等の調査書に基き（個人出願の場合は學業成績證明書等に依り）且中等學校等よりの從來の入學者の實績等を參考として入學せしむべき定員の約二倍を選拔し、第二次に於ては第一次に於て選拔せられたる者に付筆答試問、實技調査、人物考査及身體檢査を行ひ入學せしむべき者を決定す。

二、身體檢査は特に結核性疾患に付嚴重に之を實施するものとす
三、人物考査は人物及向學心、研究心の厚薄等に付之を行ふ
四、筆答試問は學力の程度を考査する意味に非ずして教員たるの素質、能力の有無を察知するを目的として之を行ひ勤勞に從事することの長短が試問の結果に影響を來さゞる樣特に考慮するものとす。
五、第二次選拔を受くべき者を決定したる時は其の氏名を當校に掲示すると共に受驗票及受驗者心得を添へ之を本人に通知す。
六、第二次選拔施行の場所は當該學校とす。
七、第二次選拔を受くべき者は、鉛筆、小刀、消ゴムの外圖畫及紙工作用の鉛筆、鋏、三角定規、メートル尺を持參し又體操用服裝を用意すべし。

第四　入學資格

左の各號の一に該當するものとす。（但し年齡滿十六歲以上滿二十二歲未滿にして夫を有せざるものたることを要す）
（一）高等女學校の卒業者（卒業見込者を含む
（二）專門學校入學者檢定規程に依り試驗檢定に合格したる者
（三）文部大臣に於て一般專門學校の入學に關し高等女學校の卒業者と同等以上の學力ありと指定したる者

（四）修業年限五年の高等女學校の第四學年を修了したる者又は文部大臣の定むる所に依り之と同等以上の學力ありと認められたる者

第五　出願手續

一、高等女學校の出身者にして入學を志願する者は出身學校につき入學志願者名票用紙（入學願書用紙）を受領し之に所要の事項を記入し入學志願の旨を出身學校長に届出づべし

（右届出ありたる場合高等女學校長に於ては本人に關する調査書及本人所屬の學級一覽表を取纒めの上出願期間中に當該學校に提出す）

二、專門學校入學者檢定規程に依る檢定合格者にして入學を志願する場合は入學志願者名票（入學願書）の外當該檢定試驗の成績證明書を添附の上本人より直接當該學校に出願すべし

三、入學志願者にして已むを得ざる事情に依り急を要する場合には第一號該當者と雖本人より直接入學志願者名票を當該學校に提出出願することを得但し右の場合には其の旨直に出身學校長に届出て所要の書類の進達を依頼すべし

四、入學志願者より前號の請求又は其の他の照會をなす場合は凡て返信用のため自己の宿所氏名を明記し且郵券六錢を貼附せる封筒を封入して差出すべし

五、入學志願者は同一期に選拔を施行する學校に付ては一校に限り志願することを得若し二校以上に亙り出願したるときは入學を取消すことあるべし

六、入學志願者にして他の期に選拔を施行する學校に併願する場合には必ず既に志願したる學校名を入學志願者名票の所定欄に記入すべし

七、現に官公職に在る者又は服務義務年限中の者並に現に在學せる學校卒業後服務義務を有する者にして出願する場合は本屬長官の受驗承認書等を添附すべし

八、高等女學校長より出願書類の進達ありたるとき又は個人よりの出願にして書類整ひたるときは之に對し直に願書受領の旨當該學校より通知せらるゝものとす

九、第二次選拔を受ける者は筆答試問の前日午後一時より午後四時迄の間に於て夫々其の入學志願學校（東京女子高等師範學校）に出頭し諸事承知し置くべし

右出頭の際寫眞一葉（成る可く半身脱帽正面單身撮影したるもの、裏面に志願部科名・氏名及び撮影年月日を記入したるもの）を持參提出すべし

第六　其他注意事項

一、入學檢定料金參圓を要す。入學出願と同時に現金或は振替にて納附すべし

二、入學を許可すべき者の氏名、部科等は本人に通知す

三、入學を許可せられたる者にして他の期日選拔を施行する學校に出願しある者は當該學校の第二次選拔試驗を受驗し得ざるものとす若し右に違背したる場合には兩校共入學を取消し又は不許可とすることあるべし

四、外地又は外國に在住する者にして內地所在の學校に入學を志願する者の選拔に付ては別途措置を講ずるものとす

附記。尙詳細は十一月二十四日の官報によつて承知せられたい

又東京女子高等師範學校敎務課（東京都小石川區大塚町三五）につき入學募集便覽を請求して閲覽せられたい。郵便で請求の場合は必ず自己の宿所氏名を明記し郵券六錢を貼附せる封筒を封入して申入れられたい、又、保育實習科は修業年限一ケ年、授業料年金五拾五圓を要し、通學距離一時間以內にある自宅や或は確實なる宿舍よりの通學とし寄宿舍の設けがない。）

陣友音信（四）

――歳暮雑感――

倉橋惣三

○この年を送るにつけて、この苛烈な大戰下に、幼兒保育者としての職分を以て、保育報國の御奉公をつゞけることの出來た私どもは、まことに有り難いことでありました。

○それにしても、今年、東京都その他で幼稚園の當分休園といふことのために、保育界から離れることになられた人々に對してはなんともお氣の毒にたへません。幼稚園の當分休園の時局的理由は別として、この幼兒保育者の多く準備せられてゐなければならない際に、あの熟練な保姆さん達を失つたことは、心あるものゝ皆遺憾とせるところでありました。文部省が、高等女學校の生徒に保育實習を必修させてまで、非常の必要に處し、國の大切な幼兒の護り手を作らうとしてゐる時にです。更に又、急に樂しい幼稚園を閉された幼兒達の生活と教育とに就ては、心あるものゝ憂慮にたへないものがありました。疎開が一番いゝことは勿論ですが、殘らずの幼兒が疎開出來るのではありません。その子たちは幼稚園から母の手に歸されるといふのですが、その母の手が忙しいのです。そこで、母の手よりも街頭に出されました。從來のやうに、遠方の子が集團する幼稚園は危險であるとして、幼兒を街頭や留守家庭に置くのは尚危險です。此の狀勢下に新らしい幼稚園方式が案出せられる筈でした。――併し、今は戰時下、多くは言ひますまい。たゞ、その保姆さん達の分と、その幼兒たちの分と、それが、今私たちの保育心に乘り移つてゐることだけをいふに止めて置きませう。

○が、日本の幼稚園令は嚴として存してゐるのであります。時局に鑑みての幼稚園の當分の休園を、幼稚園そのものゝ閉止や、況んや禁止と間違へてはなりません。あわてた人や、日頃幼兒保育に無關心の人々の中にはそんな取り違ひをしてゐることもあるかも知れませんが、勅令による幼稚園令の權威は忘れないで下さい。況して、休園といづても、全國としては一部のことです。大多數の幼稚園と大多數の保育者とが、戰時下の幼稚園として、その御奉公に奮鬪してゐるのであります。

○それにつけても戰時保育の眞使命は、充分研究せられ充分實現せられなければなりません。それは軍需と生産に多忙な戰時の母の手を助けるといふことを大きな任務とすると共に、決してそれだけで終るものではありません。それは、いふまでもなく、皇國の大切な幼兒の成長のための保育施設です。そして、保育施設とは、厚生施設であると共に教育施設であります。教育施設であると共に厚生施設であります。戰時保育の眞の重要性は、この意味においてこそ存するのであります。

○と同時に、戰時保育の特色は、それに從事する保育者の、戰時的專心と戰時的努力とにあるのです。その嚴肅な特色を自ら實具しないものによつて行はれるものは、決して戰時保育の名に値しません。平時においては、自分の趣味だけに基く、謂はゞ遊び半分の保育でも許されました。今日の戰時保育は、そんな道樂保育ではありません。平時においては、自分の全力を盡さない、謂はば閑仕事としての保育でも見のがされました。今日の戰時保育は、そんな片手間保育ではありません。戰時下の一切の生活と等しく、眞劍と全力との奉公保育のみが、戰時保育と名づけられるものであります。

○それだけに、今日の戰時保育者の勞も大であり、苦も亦少くありません。私はそうした陣友諸君に、多大の感謝を捧げると共に、その自重を望むこと切であります。

○自重の第一が、健康の注意にあることはいふまでもありません。健康によつてのみ、戰時保育の勞苦にたへ得るからであります。しかも、自重はそれだけではありません。眞の保育精神の充實に就て、たえず意を用ゐてゐなければなりません。戰時保育はたゞがむしやらにやつてゆけるものではありません。國民保育の大使命を完全に果さなければならぬからです。更に、これらの自重と共に、保育者としての研究に一刻の怠りもあつてはなりません。なんとなく慌しく過ぎ易い戰時下の生活です。餘程自ら自重してゐないと、興奮ばかりして勉强を忘る日がつゞきます。それでは苟も國民の教育者として、自重してゐるとはいへません。

○自重を乞ふと共に、幼兒保育者同志の勵まじあひ、慰めあひ、いたわりあひも亦、切に望ましいことであります。互に陣友であります。他の方面の人々は皆、それ〴〵の部面に多事であり、劇忙であり、慰めも助けも求め難いのが戰時下の常です。陣友だけが互の力であります。

○この音信を認めてゐた最中、敵の空襲がありました。完備の防空陣で、その被害は輕微だといふことであります。私ども帝都の保育者は、帝都の幼兒のためにその萬全を祈りつゝ、各自の部署に手落ちなきことを期して居ります。帝都以外、既に空襲を受けられた土地の保育者諸君の强い意氣にならつて。

生徒募集

一、幼稚園保姆生徒　壹百名

一、願書締切　二月十日限り

詳細は入學案内にあり郵券七錢同封御請求あれ

東京都淀橋區下落合三丁目一、三八八

東京目白保姆學校

校長　和田實

電話、落合、二五五九番